http://decfamily.p1.bindsite.jp/2013NEW/

We 25R

No.314　　14/01/15

こころの未来を研究する

京都大学に文理の枠組を越えた「こころの未来研究センター」なるものがある。そのセンター長、吉川左紀子さんのインタビューを紹介しよう。

＊

―ユニークな名称ですね。

こころをテーマにした新しい研究センターですから、ワクワクするような場所にしたい。名称はとても大事だと思いました。私たちがこのセンターで一番したいことは、人が未来に向かって生きていく支えやヒントになるような成果を発信する、ということに尽きます。研究とはすでに起きた現象を分析して「こんなことが分かりました」と事実を明らかにすることですから、過去・現在・未来という時間の流れでみてみると、過去と現在です。でも、そのメッセージは未来に送りたい。そこで「こころの未来のための研究をする、こころの未来研究センター」。これがいい、と思いました（笑）。（略）

―創設時からのセンター長として、スタート後も苦労があったのでは？

三、四年つらかったですね。こういう名前のセンターが京大に出来たとなると注目されます。マスコミを含めて、どんなセンターが出来たのだろうと皆に興味を持たれる。ただ、表向きには「日本中探してもこんな研究センターは他にない。これからの社会で、何をするにも人の『こころ』は非常に大切。だから、それを中心に据えて研究する意義がある。」と言いながら、確たる自信があったわけではありませんでした。「みんなで取り組む共同プロジェクトを一つに絞って取り組んではどうか」と多くの方からアドバイスされ、私もそうした研究ができないかと思ったのですが、センターに集まった研究者の専門分野は神経生理学、認知科学、臨床心理学、宗教学、倫理学です。こころに対する考え方や価値観、アプローチも全く違いますから、研究テーマを絞ることは不可能でした。（略）

―そもそもこころの問題は専門分野や学内もさることながら、社会の関心が高いのでは？

社会の関心は高いのですが、こころを扱う専門分野がその期待に追いついていない状況だと思います。一つは心理学の細分化の問題、もう一つは心理学の基礎研究と社会の現場で仕事をする人たちとをつなぐ仕組みが弱いこと。欧米の総合大学でサイコロジー・デパートメントのないところは少ないと思います。一方、日本の国立大学に心理学部はありません。複数の学部や研究科に研究者が分散していることが多い。心理学は、知覚心理学、認知心理学、発達心理学、社会心理学、臨床心理学などいろいろな分野に分かれていて、それぞれの分野に研究者ソサエティがあります。基礎系の心理学では、こころの働きの一部に焦点を当てて実験を行い論文を発表することで成果を蓄積してきました。一方で、直接こころの悩みをもつ人たちと接して一人ひとりのこころと向きあう地道な仕事をしているのは現場のカウンセラー。どちらも、心の理解をめざす研究であり実践ですから、外から見れば、相互に補いあう関係になるのが自然だと思われると思います。ですが、実際にはそうならずに、それぞれが独自に自分たちの専門領域を守ってきました。

心理学に限らず人間に関わる学問は、どの分野でもそうした難しさがあるようです。以前、京大総長だった医学者の井村裕夫先生とお話しをした時、医学にも病気に向きあう医学と患者に向きあう医学があって、日本では患者に向きあう医学が遅れているということでした。　（学士会会報Ｕ-７　vol.53）

＊

続きに興味ある人は申し出て下さい。貸します。